

## アクセプタブル・リスク

2020.7.27

「アクセプタブル・リスク」という概念がある。危機管理学上の用語で「受容可能なリスク」と訳す。アクセプタブル (acceptable) とは、受け入れることができる、受諾できる、容認できる、満足できるといった意味である。

我々が生活している社会には、いろいろなリスクがある。例えば、交通事故がそうである。最新の2019年の死者数は過去最少で3215人である。ピークは第一次交通戦争と言われた時期の1970年で、16765人である。

新型コロナウイルスによる国内死者数は、初の死者が出た2月中旬から5月末までの3ヶ月で約860人だから、それに比べて交通事故の死者数は大変な数である。しかし、車が禁止されるわけではない。仮に強制的に禁止でもされたら、現代社会は一気に瓦解してしまう。

だから、事故防止の交通政策を推進しながらも、車社会との共存を図る。これが受容可能なリスクである。つまり、何でもかんでも拒否したり禁止したりすれば社会生活は成り立たない。そこで、受け入れ可能な条件はどのあたりかを合意して危機管理にあたらねばならない。

それと同じで、新型コロナウイルスを根絶するまで終息とみなさないのではなく、どういう条件がそろったら終息とするのか、今後、社会の中で合意しておくことになるであろう。あとは、日常の中で防疫対策を充実させればよい。世の中は、極端から極端に走りがちである。0か100ではなく、バランス感覚がほしい。受容可能なリスクを念頭に置いて危機管理の運用に慣れることが必要である。

梁川高校は、7月23日(木)より夏季休業に入った。県内公立高等学校の中では早いほうである。新しい生活様式に大きな変化はないが、依然として不要不急の外出は自粛すべき状況である。そうであれば、子どもは家庭でどんなことをすべきか。

一つは、ありきたりではあるが、読書である。高校生であれば、多少無理をしても長編小説を読んでほしい。夏目漱石の『こころ』、ドストエフスキーの『罪と罰』など、どうであろう。もし読破できたなら、得るものは大きいはずである。

もう一つは、これもありきたりではあるが、お手伝いである。子どもが道徳心や正義感を身につける活動として、お手伝いに勝るものはないそうである。自分が誰かの役に立っているという自覚は、子どもにとって極めて大切である。お手伝いは、それが形式張らずに普段着でできる。そこがいい。しかも家族に喜んでもらえる。子どもの心を浄化する力がある。そして、そのお手伝いの心を社会化したのがボランティア活動である。

当初の本校の年間指導計画では、ボランティア活動を位置づけてあった。1学期は、なかなか厳しい状況が続き、実施には至らなかった。2学期も先行き不透明ではあるが、状況が許せば、ぜひ生徒にボランティア活動を体験させたい。みんなが助け合いながら共生する社会をつくりあげるためには、若者にそうした機会を与えることに大きな意味がある。2学期は、ボランティア活動ができるくらい受容可能なリスクとなることを願うばかりである。